

お疲れ様でした。

松 本 敏 史

鵜飼先生が古稀を迎えられ、同志社を定年退職されることになった。兄弟子の古希記念出版である。本来なら大部の研究論文を執筆投稿させてもらうべきところ、諸般の事情で締め切りを守ることができそうにない。その私に対して、「松本君の名前がないのは寂しい。往復の新幹線の中で書いてくれ。だめなら諦める」と言われたのが、当初の目次にはなかったこの文章である。言うまでもないことだが、この文章が急遽目次に付け加わったのは出来の悪い弟弟子に対する思いやりであり、論文を投稿できない私への配慮である。鵜飼先生の人柄を表わす一件として、あえて舞台裏を披露させていただいた。

先生とのお付き合いはすでに37年になる。過ぎてみれば一瞬のような気もするが、この間、様々な出来事があった。詳細はすでに忘却の彼方にあるが、還暦を超えた今でもフラッシュのように脳裏に蘇ってくる断片的なシーンがある。そのいくつかを辿りながら、鵜飼先生の「人と学問」を紹介させていただきたい。

鵜飼先生との出会い

鵜飼先生と初めて出会ったのは、私が内川菊義先生の院生になったときである。至誠館の廊下でいきなり声をかけられ「松本君。この仕訳の意味、分かるかなあ」といわれた。たしか二部（夜間）の「簿記学Ⅱ」の授業が始まる直前だったと思われるが、そのとき先生が手にされていたのが、1960年に春秋社から出版された馬場克三・内川菊義著『基本簿記概論』である。この本は教科書として執筆されているが、個別資本循環説（G-W-G'）に基づく独自の勘定学説が織り込まれている。また木炭を商品勘定名にするなど、戦後日本の批判会計学（理論会計学）の足跡だけでなく、出版当時の時代状況を伝える貴重な一冊である。

それはさておき、鵜飼先生が会計ゼミ出身の私を呼び止めたのには理由がある。実証研究やファイナンス理論を重視する今日、「仕訳」が出来ない（簿記を必要としない）会計学者は決して珍しくない。当時の鵜飼先生もそのような存在だった。学部時代は竹林庄太郎先生のゼミで中小企業論の勉強をされた。大学院に進学された後はヒルファーディングの『金融資本論』に基礎に置いた株式会社の資本会計が研究テーマである。技術論としての簿記を本格的に勉強されたのはおそらく授業を担当されてからであろう

(私自身も最初の担当科目である「銀行簿記」の勉強を始めたのは授業の2か月前だった)。今日ならFD(ファカルティ・ディベロップメント)以前の問題として大いに批判されるだろうが、当時はおおらかな時代だった。いずれにしてもそのような事情を知らない私は、先生のあまりにフランクな態度に驚いただけで、質問には答えられなかった。今では何を聞かれたか覚えていない。

ご自宅訪問

商学研究科の主(ヌシ)的存在だった原田孝夫氏の呼びかけで、百合野正博氏(現同志社大学商学部教授)、堀村不器雄氏(現堀村公認会計士事務所所長。当時、明德館二階の同じ院生室に巢食っていた)と一緒に鶴飼先生のご自宅を訪ねたのは、先生が結婚された直後だった。当時のご自宅は山科の四宮にある一戸建てで、堀村氏の記憶によると三畳の書齋にマルクス・エンゲルス全集が全巻揃えられていた。なによりも次から次へと出てくる奥様の手料理に魅了され、四宮の次は岩倉の旧宅、その後は新築された現在のお宅へというように、以後、数えきれないほどお邪魔をして迷惑をかけた。いわゆるストーカーである。申し訳ないと思いつつも、居心地が良かったため、しばしば夜遅くまで居座ってしまった。その間の思い出は数えきれないが、ここではあえて物の話をしよう。実は鶴飼先生の人となりを表すグッズが二つある。

今でも鮮明に覚えているが、四宮のご自宅を4人で初めて訪ねたとき、先生が駅まで迎えにこられたときの車は丸いホンダのシビックだった。問題はその外観である。汚れていたのではない。天井に大きな円が描かれていたのである。永年の風雪のためか、あるいは当時のホンダの塗装技術のせいかわからないが、天井の塗装が重層的に大きな円を描いて剥がれ落ちていた。シビックの次に中古のトヨタカリブを購入されたが、その後の車もすべて廃車になるまで使われた。ちなみに私は少し気に入らないところがあれば乗り換えを考える。ところが先生は「まだエンジンがしっかりしている」とか、「足回りがいい」とおっしゃる。よれよれのアクアスキュータムのトレンチコートを着て廃車寸前のサーブに乗るコロombo刑事ではないが、車については経済性の観念を超えた何がしかの哲学を持っておられるようである。

そしてもう一つのグッズがオーディオ装置である。iPodやスマートフォンで常時音楽を聴いている若い世代には理解できない世界だが、戦中生まれの先生はオーディオ装置が大好きである。高度成長の頃、国内外のプリアンプ、メインアンプ、スピーカー、レコードプレーヤー等を順番に買い替えていき、ついには高級オーディオセットを築き上げることに無上の喜びを見出していた世代である。先生が50代のころだったと思うが、父母会か何かの帰りに二人で秋葉原に行ったことがある。もちろんメイド喫茶に用

があったわけではない（そのころはまだ存在していなかった）。当時の秋葉原の電気街はオーディオ装置のメッカで（今はもう廃墟になっているかもしれない）、ただ見て回るだけで楽しめた。その鵜飼先生の自慢の装置が、トランジスタの代わりに真空管を使ったアンプと高音質の大型スピーカーである。先生によると真空管は音が柔らかいそうだ。そういえば昔、城崎温泉に『真空管』という名の喫茶店があった。一家言も二家言もありそうな親父がレコードに針を落とした後、サイフォンのコーヒーをかき回していたが、その店はもうない。閑話休題。この真空管アンプについて、鵜飼先生には非常に不愉快な思い出があるはずだ。岩倉の旧宅で初めて真空管の音を聞かせてもらったとき、私は思わず「ラジオの音がする」と言った。この一言が先生をひどく傷つけたらしい。後日、研究室でコーヒーを飲みながら、亡き山根学先生が「松ちゃん、ラジオの音がする言うたらしいな。ショックやったらしいで」と言われた。実は近所の手前、夜間で音量を絞っていたのだが、音が小さすぎて私には違いが判らなかつた。それを「ラジオの音」と表現したのだが、鵜飼先生は「並みのオーディオ以下」という意味にとられたようだ。あるいは、小さな音でも違いを聞き分ける必要があったのかもしれない。あまり知られていないが、鵜飼先生はミュージシャンでもある。正確に言うとフルート奏者で、音楽には造形が深い。その先生にとって当然聞き分けられるはずの違いが私にはわからなかつたのかもしれない。猫に小判である。

学 問

先ほど紹介したように、鵜飼先生は物持ちがいい。ただし物質的な豊かさよりも精神世界を重視する平和主義者である。よほどのことがないかぎり怒りを面に出さない。争いがなによりも嫌いで、理不尽な対応にもじっと耐え、嵐が去るのを待つタイプである（そんな先生を我々後輩は「ガマ哲」（我慢の哲夫の意）と密かに呼んでいた）。社会科学は人格を反映するというが、鵜飼先生にもこの格言が見事にあてはまる。そのことについて語るためには我々の学問上のバックグラウンドを若干説明しておかなければならない。

まず同志社大学商学部の会計学分野だが、一言で表現すれば雑居ビルの様相を呈していた。まず、学派がばらばらである。神戸大学出身の先生方の「通説」に対して、長い間、一大勢力を誇っていたのがいわゆる「批判会計学」である。この批判会計学も「宮上理論」を継承する学派と、「個別資本循環説」を基礎に置く学派に分かれていた。この混沌状態の中で、同志社大学のスーパースターである井尻雄二先生（カーネギーメロン大学終身教授）を生んだ西村民之助先生のように、飄々としていずれにも属さない先生もいた。

鶴飼先生と私が師事したのは「個別資本循環説」を発展させた内川菊義教授である。内川先生の経営学と会計学の恩師は馬場克三教授（九州大学）、経済学の先生は『資本論』の翻訳で有名な向坂逸郎教授（九州大学）である。内川先生は93歳になられた現在もなお、日本会計研究学会の全国大会で多くの研究者を前に学会報告を続けておられる。この一点をみても、内川先生の指導が半端なものではなかったことが容易に想像されると思う。内川先生は現役時代、主として「資本金会計」と「引当金会計」の分野で膨大な業績を上げられた（現役を退かれたのは20年前だが、Googleで検索すると17,700件ヒットする。我々の5倍を超える）。このうち、鶴飼先生は資本金会計の研究を引き継ぎ、私は引当金会計をテーマにした。

ところで内川先生の学説は通説とかなり異なる。むしろ通説の批判を使命とされてきたと言ってもいい。そのもっとも有名な学説が額面超過金（＝株式の発行価額－額面金額）等の資本準備金を利益とする創業者利得説である。たしかに商法も額面超過金を配当財源に含めていたことがある（詳しくは鶴飼哲夫「資本準備金制度成立期における法と会計の相克」『同志社商学』第58巻第6号、2007年）。しかし学会の通説はほぼ完全に資本説であり、同じ個別資本循環説の泰斗である故岡部利良教授（京都大学）も資本説を採っていた。このような学会状況の中で利益説を主張するならば、激しい論争と批判の応酬を覚悟しなければならない。おそらく鶴飼先生が最も苦手とする（嫌いな）状況である。それにもかかわらず鶴飼先生は、正統な後継者（最初の弟子）として、恩師の最大の理解者であり続けた。学会報告の場や『同志社商学』『会計』等で早くから師匠と論争を繰り返していた（逆らっていた）私とは大違いである。しかし、森山書店から『株式発行の会計理論』（1994年）を出版される時、先生が内川先生と異なる学説を展開し、師弟間で静かな、しかし厳しい論争が展開されたことがある。鶴飼先生の意外な一面を観た気がした。

学部長時代

生来の我慢強さと緻密な思考能力が最も発揮されたのは学部長時代だったように思う。山根学学部長の急逝を受け、急遽先生の登板となった。

何故なのか、その理由を聞いたことはないが、先生はカリキュラムの策定に極めて熱心である。私が30代の頃だったように記憶しているが、当時の学部長の依頼で鶴飼先生が積年の課題であるカリキュラムの改訂に努力されたことがあった。当時の商学部の設置科目は御多分にもれず、俗人的な色彩が強かった。また必修科目の全廃など、学生紛争の名残もあった。なにより問題なのは設置科目が硬直化していたことである。時代の要請に合わせたカリキュラム改革の必要性は誰もが認識している。しかしその内容に

つについては個々の教員によって考えが異なる。また、科目の改廃は状況によって強い利害関係を生み出す。関連の教授の顔を思い出すとうっかり発言できない雰囲気があった。実際、それまでに何度か委員会が設置され、そのたびにカリキュラム改訂案が提起されたが、議論は紛糾し、それが実を結ぶことはなかった。今では許されない状況だが、これも歴史的事実である。

そこに風穴を開けるべく鵜飼先生が提案したのがセミスター制の導入と、関連科目の教員の協議のもとに開講できる科目群の設置である。この提案も簡単に採択されたわけではないが、鵜飼先生の粘り強い説得と、アイデアの斬新さが功を奏し、それまでのカリキュラムが大きく変わることになった。

教育システムの改革に対する鵜飼先生の情熱は学部長時代も変わることがなかった。その基本理念は常に「学生のために」である。それにしても学部長の仕事は激務である。教務主任として傍で見ていたが（自宅にも何度も伺ったが）、ルーティンの仕事は大した問題ではない。最大の仕事は対立する利害の調整であり、その範囲は学部から全学に及ぶ。実質的な教授会は正式の教授会の後に展開される。そこで発揮されたのが、持ち前の我慢強さと粘り強い説得であり、自己の利益を度外視した対応である。それによって、多くの行政事項が処理されただけでなく、商学部の最大の問題であったいくつかの人事案件も通過した。

繰り返しになるが、学部長の仕事は半端ではない。複数の学部長が在職中に亡くなった。先生の白髪が一気に増えたのもこの時期である。胃の調子も良くなかった。学部長生活が終わったときの晴れやかな顔は今でも覚えているが、額には深いしわが波打っていた。

む す び

2007年のことだが、英国の Chris Humphrey が客員教授として赴任してきた。彼は私が30代になりたてのとき（1986年）、在外研究先であるマンチェスター大学で知り合った研究仲間である。当時の彼は最年少の教員だったが、今や英国を代表する会計学者である。学生の刺激になると考え、半年間の講義を頼んだところ、厳しい日程を調整して快く引き受けてくれた（当時、彼はマンチェスター大学の学部長であり、国際会計士連盟40周年史の編集長もしていた）。彼は2月に来日し、一か月ほど私の書斎用のマンションで過ごした後、遅れて合流した家族（奥さん、小学4年生の息子、小学校入学前の娘）と一緒に岩倉のゲストハウスに引っ越した。近くにはできたばかりの同志社小学校がある。初代校長の鈴木直人先生に無理を言って子供2人を2か月ほど通わせてもらうことになった（子供たちにとってこの小学校はよほど楽しかったらしく、今では完璧

な親日家である)。ただし、日本語がまったくできないため、当初、かなり不安がっていた。そこへ現れた救世主が鵜飼ファミリーである。特にお嬢さんの綾子さんは抜群の英語力の持ち主で、英国に何度も通っている。本来なら私が面倒をみるべき立場だが、地理的な問題で鵜飼先生に相談相手を頼んだ。クリスが乗り回していた自転車も鵜飼邸から拝借したものだ。おそらく家族で押しかけ、様々な場面で迷惑をかけたに違いない。後に奥様が「一気に国際化した」とおっしゃったことから容易に想像がつく。

その Chris が帰国前に私につぶやいた。「鵜飼夫妻はとても classy だ」。この一言が先生をもっとも適格に表現しているのかもしれない。

鵜飼先生、長い間、本当にお疲れ様でした。これからは新車のスバルを廃車になるまで乗り回し、楽しい生活を取り戻されるよう心から祈っています。ありがとうございました。